

ひまわりからの

メッセージ

20号

2012. 11. 13.

西濃園城
発達障がい支援
センター・ひまわり
発行人：中野たみ子

背高泡立草に

寄せて



先日、揖斐川の堤防を車まで走りました。

運転しながら横見をしては危いと思いましたが、余りにも秋の景色が美しくて見入ってしまいました。とうとうと流れる揖斐川の水の色と、堤防の穂すすきと、背高泡立草の黄の花と……秋の深まりを感じました。

北アメリカ原産の背高泡立草は、キク科の多年草で、日本に入ってきた頃には、その名の通り高草が一、五メートルからニメートルもあって、アレルギーを引きおこすとも言われたものでした。でも今は、すっか

り背が低くなっていて、自然に日本の風土にとけこんでしまっ
たという気がします。

ところで、子どもたちはどうでしょうか。人見知りを余り
しない子どもたちの中には、まるで場所見知り、物見知り
と言いたくなるような行動を示す子があります。はじめの
場所や、はじめで見る物に対して怖がり泣いたりして
不安を訴えてくることがあります。それは、ことばの通じ
ない外国に一人ポツンと置かれた状態に等しいのだとよく
言われます。どうしたらいいのか、これから何が起るのか、
見通しがもてない状況は、子どもたちならずとも不安に感
じます。

ことばをもたない泡立草は、環境の中にとけこんでいるの
に、子どもたちは、ことばをもつ故に、いつまでも生きづら
さをもっていくということでしょうか。「言えば分かる」「聞
けばわかる」という先入観は、私たちの日常の中では当然
のことですが、この社会にうまくとけこめない子どもたちや
生きづらさをもつ人たちのことを、いつも心に留めていた
と思えます。堤防を埋めつくすように咲く泡立草を見
つつ、子どもたちのことを思っていました。

子どもたちの未来

その鍵をにぎるのは……。



今頃、お母さん方の手元には、教育委員会から就学に関する書類が届けられている頃ではないでしょうか。もちろん、「入級のすすめ」ばかりではないが、親として決断を迫られる時ですね。

今まで、本当に多くのお子さんやお母さん方に出会ってきました。そして、その子にとって、その時に私が考えうるベストを常に探ってきましたが、それは時にはお母さんたちと考えを異にすることもありました。ただ唯一、私が一本筋を通したのは、「お子さんにとって、どうなのか？」という点でした。ご家族を取り巻く地域やご家族の意思、見栄などはさて置き、お子さん自身にとっての学びの場はどがいいのか、将来のことも考えたと上で、一つ一つ積み上げて、自立に向けていって下さる場合はどがいいのか……という点でした。

私たちは、アドバイスをする立場であって、お子さんの現在も、そして将来にわたっても責任をとるのは保護者です。最終的な決定は、保護者にゆだねられます。ですから、「うちは、何が何でも通常で……」と決められれば、私たちはスマイルブックを活用しながら、そのお子さんの具体的な支援を探っていくことになります。

しかし、就学のお話や、お子さんの発達についての話になると、お母さんたちが我が子に対してもっていらっしゃるイメージや理解には、園や学校の先生と、大きな開きがあることにも気づかれます。生活面での自立がまだできていないけれど、支援員がついてもらえば支援学級でやっていると判断されるお母さんや、知能指数が六〇代なのに、グレーゾーンの子どもであると信じていらっしゃるご家庭もあります。「今、すごく伸びてきていると思います。だから通常学級でできると思っています」とおっしゃるのに、対して、本当にそのお子さん自身としては、とても成長しているけれども、他の同年令のお子さんたちは、もっと伸びが大きく、差は大きくなっているということも多々あるのです。

私たちは、お父さんやお母さんに対して、正しい理解をしていただけるように、常に話し合いをしていかななくてはいけないと思います。

遠い昔、私は双児の兄弟に出合いました。下の子はこだわりが強く、自閉症で、まだ発語もなく、走り回り、高い所に上って目がはなせないお子さんでした。二人は三歳でした。

療育を始めて半年位たった頃だったのでしようか。お母さんから就学についての質問がありました。それ以前からお母さんは、双児だから一緒に……という思いが強く、事あるごとに話されていきましたので、私にもお母さんの気持ちには十分にわかっていました。けれども、上のお子さんと同じ学校に行くことは、むづかしいことでした。例え、特別支援学級(当時は特殊学級といっていました)であってもそのお子さんに一対一でかかわっていくことはできないことでした。

お母さんにしてみれば、三歳で一年や二年の遅れがあったとしても、六歳になれば追いつくか、あるいは、そのまま一年か二年の遅れでずっと成長していくだろう

という思いがあまりになつたと思います。

「兄弟そろって同じ学校へ行けますか?」というお母さんの問いに、私はパールバックの『母よ嘆くなかれ』という本を一瞬の間に思い出し出していました。

『大地』という小説を書いたパールバック女史には、ダウン症のお子さんが生まれました。彼女は、いろいろな専門家に自分のお子さんについてたずねたそうです。誰かがことを濁し、ある人は気の毒そうに慰め、ある人は彼女にとっての心地よいことばを言ってくれたそうです。けれど、彼女はずっと真実を言ってくれる人を探し求めたということです。それは長いく心の旅路でもありました。そして、ついに彼女は、自分の子の障がいに行きついたのです。一人の中国の医師によって……。

双児の子のお母さんの問いに、私はやはり真実を告げようと思いました。例えこの場を心地よいことばで過ぎたとしても、お母さんは悩みつづけていかれることでしょう。真実のことばを求めていかれると思ったのです。お母さんから問いかけられた時にこそ、私もお母さんにもっとすぐに向き合わなくては……と思ったのです。

その時、そのお母さんは、「わかりました。下の子にとつては養護学校(今の特別支援学校)で学ぶ方がいいと言っていることですね」と言われました。私には、非常におちついて冷静に見えました。

私はずっと悩みつづけてきました。お子さんにとって養護学校が良いと言ったことは、今もそう思っているのですが、私がずっと心に問いつづけたのは、「本当に、あの時よかったのか。あの時に言うべきだったのか。もっと別の時ではなかったのか……。」ということでした。

そのお母さんは、「私は、就学の時に迷うことはありませんでした。先生、言って下さって良かったんですよ」と慰めて下さりました。

けれど、私が告げたあの日、お母さんは車の中でボリューム一杯にして音楽を流し、泣きながら二人子と、どこを走ったのかわからなかった……と後で教えて下さいました。

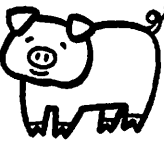
その時のお母さんの心の痛みを忘れてはいけないとずっと私は思っています。でも、同時に、子どもたちが、ただ

教室に座って、「お客様」でいることの辛さや苦しさを、お母さんたちは、本当におわかりなのだろうか……とも思うのです。

多くの学校を訪問すると、通常学級の中で困っている子どもたちに多く出会います。先生方も一生懸命に教えて下さっていますが、毎時間、どこまで子どもたちに教えていくのか決まっていますから、一人のお子さんだけを特別視できないのは当たり前です。スマイルブックの引きつぎにしても、あくまでも、その子の在籍クラスで、担任の先生にでき得ることをお願いしています。でも、すぐに集中がとぎれる子、話を聞いていない子、先生が説明するそばから勝手にしゃべる子など、行動面での困り感をもつ子、理解することができずに困っている子など、一クラスの中に何人もいる支援を必要とする子に、先生方も悩んでいる様子です。そういう実態がなかなか保護者の方に伝わっていないということも、次の年の就学指導で、生かされていない原因の一つなのかもしれません。

一方、保護者の方が、「子どものために……。」と、支

援学級へ入級させたものの、期待をうらぎられたと思ふ人たちもいらっしゃる。そういうお母さん方に出合うと、その悔しさを、悲しさに対して非力な自分をつくづく情ないと思ひます。子どもたちの今を、そして未来を支えていく一人でいたいと思ひます。障がいをもつ子、発達のアンバランスをもつ子を理解していくということは、私たち自身のためにも努力が必要だとも思ひます。



ご家庭でできること

「子どもたちは、家庭で甘やかされて育っている」とある高校の先生がおっしゃっていました。あなたのご家庭はいかがでしょうか。家庭にルールはありますか。

- テレビやゲームの時間は決めていきますか。
- 朝の準備は自分でできますか。
- 生活面の自立はできていきますか。
- あいさつはできますか。
- 早寝早起きでできていきますか。

※ゲームについて

夜、寝る直前までゲームをやっていると、脳は興奮状態になってるので、布団に入ってもすぐには寝つかれないでしょう。

ゲームは入浴までと決め、入浴したら床に入るといふ生活をためしてみましよう。朝からボーツとしていて覚醒レベルの低い子は特に考えてあげましよう。

※片づけができない子

片づけは、基本的にはマッチングです。同じ物同士を集めるということです。容器は、横から見てもわかるように、全てラベルをはっておきましよう。どこに何が入っているのかがわかると、片づけも楽になるはずですよ。整理整頓ができないと、大人になってからでも困ります。

※支援の引き算をしていく

何でもかんでもお母さんがやってあげていては、自立に向けていくことが難しいのです。見守りながら支援の手をひいていくようにしていきましよう。

学校の先生にお願いすること

・ いじめを見逃さないでほしい。

・ 子どもの学習上の困り感を知ってほしい。

何故、「わかんない」と言えない？

何故、指示が聞きとれない？

何故、文字の形がとれない？

※学習上、何に困っているか、どこでつまっている

か、認知処理に特性はないか、LDではないの

か、多方面からの分析を!!

・ 支援を必ず引きついでほしい。

「スマイルブック」をもっていても、学校に預かり

っぱなしの子、「大丈夫です」の一言で片づけられ

ている子が多いと聞きます。大丈夫なのは、その

先生がうまく指導し、かかわって下さっているから

です。担任が変わっても、その支援をぜひ引き

ついで下さい。せめて四、五行でも、子どもたちの次

へのバトンをおねがいしたいと思います。

ミニミニ情報

① 心理士について

現在、心理士は国家資格ではありません。臨床心理士、臨床発達心理士など心理職は今まで一本化されてきませんでした。でも今、国家資格にする動きがあります。

② WISC-III から IV へと改訂版が出され、子どもたちの認知特性をより細かく分析できるようになりました。しかし、WISC-IV は、知能検査には向いていません。子どもたちのどんなところを知りたいかどの様に利用していくことが出来るか、課題はまだたくさんあります。数値だけを求めていくのでは意味ないのです。

お知らせ

・ 十二月例会は十二月十一日(火)です。

